

# 小児看護

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

# 7

Vol.44 No.7 JULY

# 2021

## 多職種チーム医療の ベストプラクティス

スペシャルニーズのある子どもの  
ケアの担い手として



連載

児童養護施設の看護実践  
支援が必要な児童と  
その保護者への対応

へるす出版

佐藤聡美 Sato Satomi

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

## 第3回 コミュニケーションを超える

コミュニケーションが社会における評価対象に加えられて久しい。大学では英会話のコミュニケーション、職場では上司と部下のコミュニケーション、医療現場では医師と患者のコミュニケーションと、枚挙にいとまがない。大学の就職課は、話し方や服装、マナーまで学生に教えるようになった。

私は曲がりなりにも大学人であるため、教育についても多少考える機会はある。とくに教養教科は重視する。ヨーロッパの教養教科は自由7科の文法、修辞学、論理学、算術、幾何学、天文学、音楽が根幹にある。これが流行のリベラル・アーツと呼ばれる。「日本もこれに倣え」といわれ、コミュニケーションの関連科目が加わった。

一方、日本を含む東アジアの教養教科は、もともと孔子の六芸にも影響を受けていた。六芸とは、すなわち、礼・楽・射・御・書・数を指す。第一に示されている「礼」とは、礼節や礼儀作法を思い浮かべるかもしれないが、それを突き詰めると、祖霊を祀る儀礼を意味する。どうやって正しく死者を弔うのか。これこそが人間として第一に学ぶべき事柄である、という。お気づきと思うが、ヨーロッパの自由7科に礼はない。

昨年は、「鬼滅の刃」というアニメーションが人気を博した。その物語のなかで、主人公の炭治郎は鬼に殺された人々を土葬し、弔おうとする。しかし、イノシ

シに育てられた伊之助は、そのようなことをしても亡くなった人が生き返るわけではないとして、捨ておこうとする。

この差が教養教育なのである、と筆者は考える。亡くなった人を弔わずにはおれないようになるのが、教養ある人間になるということではないだろうか。弱者をいたわらずにはおれないようになるのが、すなわち教育なのである。

子どもをみても、最初に礼を学ぶのは、親からだ。朝起きたら、親は赤ん坊に「おはよう」と声をかけるのである。そのうち赤ん坊は幼児になり、「おはよう」「こんにちは」「ありがとう」を真似ていく。あいさつをしてもしなくても、日はまた昇るため、思春期になると反発して、あいさつをしなくなる。けれども、社会性だの、コミュニケーションだのと言われて、大学生になればまた挨拶をさせられる。しかし、礼とはそれほど浅薄なものではない。「礼節を重んじる」「礼儀正しい」というのは、命に対する尊厳の表し方を知っているということだ。だからこそ、人の輪に入れてもらえるのである。

グリーフ・ケアも人をケアしているようでいて、悲嘆に暮れている人を放ってはおけない、という自らの祈りの共鳴である。そして、それは修辞や論理のコミュニケーションを超えるのである。

佐藤聡美

さとみ・さとみ

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士、心理学者。臨床心理士、公認心理師。富山県高岡市出身。米国のBellevue Community Collegeを卒業後、お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究を行う。小児がんの子どもと家族を支えるエゴニキクラブを主宰する。お茶の水女子大学特任講師を経て、現職。